宮坂和男（みやさかかずお）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第19号
学位授与年月日	平成6年7月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 哲学専攻
学位論文題目	フッサール現象学と言語哲学の可能性
論文審査委員	（主査） 教授 野家啓一　教授 岩田靖夫 教授 柏原啓一 教授 篠　憲二

論文内容の要旨

本論文は、言語を哲学の主題とすること、言語を哲学的に探求することがいかなることであるかを、フッサールの現象学と、それに密着しての乗り越えを図ったデリダの言語論に即して考察しようとするものである。言語が哲学の主要なテーマとなっていることは、現代の哲学の趨勢においてはもはや常識となっているが、言語がそもそもなぜ哲学の問題となるのか、それは哲学的にはどのように探求されうるのか、というメタレヴェルの問いを伴っていなければ、哲学的に探求することにはならないだろうという問題意識が、本論文の動機となっている。

本論文でわれわれは、哲学が取り組むべき言語の問題とは、＜意味＞の存立の問題だと考える。すなわち、物理的には単なる空気振動が生じているにすぎないにもかかわらず、ある発言がある事柄を意味することはいかにして可能になっているのか、という問題である。この問題を考えるために、本論文はフッサールの現象学を検討することから始める。

フッサールの現象学は、そもそもの始めから観念論と実在論の両方の性格を併せ持っている。フッサールの意図は、この両者の対立を解消しようとしたところにあったわけだが、この両者はむしろフッサール現象学の両義性を形成しているように思われる。そして、共存するこの二つの性格に対応して、フッサールの言語論には、一見相反するかに見える二つの姿勢が見て取られる。すなわちフッサールは、一方では、言語の意味の根拠を意識的内在に求め、内在的に存在するイデア的意味

への関係を本質的・第一次的と見なしている。だが、それと同時に他方では、言語の意味を<対象への関係>から規定しようとし、さらには意味そのものをも対象的なものとして考えようとしている。前者の見方は、『論理学研究』から『イデーン』にかけての時期のフッサールにおいて特徴的である。『論研』においては、イデア的な意味を実在的関連から純化する「意味論的還元」という操作が行われ、その結果、意味は意識的内在に位置づけられている。この内在的な意味が『イデーン』では「ノエマ」と呼ばれている。またこの時期においては、意識内の<志向－意味（ノエマ)>の結び付きが、フッサール固有の「志向性」概念が意味するところであった。だがそれと同時に、知覚という「原的に与える直観」の権利源泉が強調されているところにも見られるように、「志向性」は、意識の実在的対象そのものへの直接的関わりとしても考えられている。このことは、後期の『形式的論理学と超越論的論理学』後半部においてとりわけ明らかである。どちらの見方も、古典的な言語論に見られる問題性を孕んでおり、それゆえフッサールの言語論も多大な問題を含んでいると言わねばならない。

デリダは、フッサールに見られるこの二つの傾向を「現前の形而上学」として一括して批判した。どちらの姿勢も、<直接性>に定位し<近さ>に根拠を求める点で根を同じくしているというわけである。デリダが「現前の形而上学」に対置して提示したのは、言語の「反復可能性（itérabilité)」という条件であった。このデリダの主張は、とりわけデリダーサール論争において明確に把握される。この論争は、デリダがオースティンの言語行為論を批判したことから始まっている。オースティンは言語を行為の観点から考察することによって、西洋の哲学の伝統的観点から訣別しようとしていながら、発言の適切性条件として結局意識を召喚し、発言の「話す主体」への結び付きを要請する羽目に陥っている。またオースティンは、舞台の上で役者によって言われたり、詩の中で引用されたりする発言を「寄生的用法」と呼んで、言語の非本来的な現象と見なしている。これに対してデリダは、むしろこのような「寄生的用法」において引用され反復されるべくコード化されていることが、言語一般が機能する条件だと考える。そして、この「反復可能性」が純粋な形で見出されるのが「書かれた言語（エクリチュール)」においてである。「エクリチュール」においては「反復可能性」が、発言の主体への結び付きから切り離されて純粋にそれだけで存立しているのである。

サールの反論とそれに対するデリダの応答を検討することは、この「エクリチュール」概念を正しく理解する上で有益である。サールは、書き言葉に限らず話し言葉もまた反復可能であること、いかなる言語的要素も反復可能であることを主張した。だが、これはまさにデリダの主張と一致することである。デリダの言う「エクリチュール」は常識的な意味での「書き言葉」のことではなく、反復可能性の<可能性>を表わす象徴的概念であり、その<可能性>が<事実>としてのパロールに寄生し、それを条件づけている、ということが、デリダの主張の要点である。デリダの思考の特性は、パラドックスを解消してしまわずにそれを正面から受け止めるところにあり、そのことが≪脱構築≫という周知の概念の本領であると言っても過言ではない。一回的な<出来事>あるいは<事実>としての口頭的発言が、虚構的言説を典型とする、現場から遠く隔たった非－現前性の場

面において反復される＜可能性＞を伴っていなければ、有意味なものとして成立しえない、ということ。デリダの主張を理解するための要点は、この「事実／可能性」の区別が抹消されること、この対立を無効化する視点に立つことである。

デリダの言語論はフッサールの「現前の形而上学」を批判することによって構築されたものである。だが、デリダの思惟は単純にフッサールに対立するものとして考えられてはならない。デリダはむしろ、フッサールに密着しながらその乗り越えを図っているからである。デリダの「エクリチュール」概念は、フッサールが『幾何学の起源』において「文字記号」の自律的機能を示唆する叙述を行っているところに、その着想の機縁を得ており、その後のデリダの思考の深化とともに、もはや常識的な意味での「書かれた言語」としてではなく、上に見たような＜可能性＞を意味する概念として規定されていったものなのである。

ただデリダの思惟は、単にフッサール現象学を出発点としているだけではなく、その深化の過程においてもフッサール固有の思惟形態によって導かれているように思われる。そのフッサール固有の思惟形態を、われわれはフィンクに倣って≪自己関係性≫と呼ぶことにする。それは、探求が当の探求自身に向かうこと、自らの探求そのものを自己反省的に考察する態度のことである。この≪自己関係性≫はフッサールにおいて、とりわけ「現象学的還元」に関する考察において顕著に見て取られる。「現象学的還元」という現象学の中核的方法概念は、ある根本的なアポリアを抱えていた。現象学的還元とは、自然的態度から離れ去り、超越論的・哲学的次元へ移行することである。そこで、この移行は、その開始においていかにして可能か、という問題が生じることになる。というのは、自然的態度の中にある人間は、自分がその中で生きているといいうことにそもそも気づいておらず、自己の素朴な認識態度を自覚して還元を開始するためには、それ以前にすでに何らかの還元を行っていなければならないからである。つまり、還元の遂行は、自己前提的・循環的な誤りを避けることができないのである。フッサールはこの問題を自覚し、このアポリアを克服するべく「現象学的還元の現象学」「現象学の現象学」という自己反省的考察を展開した。

この自己反省的探求によって考察されたのが、「デカルト的道」に代わる「心理学者の道」という還元の行程である。この道の特色は、還元を、今この≪現在≫の知覚における顕在的作用にエポケーを加えることから始め、その後、それを取り囲む地平にまでエポケーを拡張してゆくという点にある。当初この道は、還元にまつわるアポリアを克服しているかに見えたが、実はそれが成功していないことをフッサール自身も気づくに至った。というのは、現在における顕在的個別作用は地平的潜在性を不可分に伴っており、顕在的作用を潜在的作用から切り離して独立させることが不可能であることが気づかれたからである。それゆえ、まず顕在的個別作用にエポケーを加え、次にエポケーを地平的潜在作用にまで拡張してゆくという段階性は無意味だということになる。還元は、すでに最初から世界に対するエポケーとして遂行されるほかはない。

このような事態に立ち至ったフッサールは、まず地平的非現前性を含まない純粋な現前性の場に到達することを試みた。この試みは、ヘルトやアグィーレが紹介している未公開草稿の中によく見

られる。非現前性をまったく含まない純粋な現前性の場とは、意味的な総合を一切被っていない純粋なヒュレーとの出会いの場面に求めなければならない。フッサールは草稿の中で、このようなヒュレーとの出会いを、「統覚（Apperzeption）」＝「付加的知覚（Ad-perzeption）」以前の「知覚（Perzeption）」と呼んでいる。そしてこの現前性の場は、同時に明証の原的な成立の場でなくてはならない以上、≪生き生きした現在≫に求められなくてはならない。この≪生き生きした現在≫への還元をフッサールは「徹底化された還元」と呼んでいる。だが、この「徹底化された還元」によって明らかにされることは、本来の目論見とは逆に、現在が非現在へつねにすでに流れ去っていること、そしてこのことに対応して、ヒュレーも純粋なものとしてはありえず、つねにすでに総合を被ったものとしてしかありえない、ということである。純粋な現前性の場に到達しようとする試みは、この原初的な時間化の場面において、ついに達成されえないことが明らかになるのである。

非現前が「実は現前にあとから付け加わるのではなく、アプリオリに現前に亀裂を生じさせ、現前を条件づけている」とデリダは言っているが、この事態はフッサールが、その≪自己関係的≫な考察の徹底した次元において見定めていることである。この点においてデリダの脱構築的思惟は、フッサールの自己関係的考察と明らかに通底するものをもっている。フッサールとの関連において見られるとき、≪自己関係性≫が≪脱構築≫の重要な契機であることがあきらかになるのである。

本論文の基本的論点は以上のことでほぼ言い尽くされており（第6章まで）、第7章以下は、フッサール－デリダ的な観点から、現代の言語哲学に見られる諸問題のいくつかを検討する内容となっている。

まず検討されるのは「哲学的解釈学」の立場である。本論文では、現代の解釈学を代表する存在であるガダマーの理論について見ることにする。ガダマーの解釈学は、歴史の先所与性を強調している点において一見現象学を乗り越えているかにも見えるが、それを具体的に検討してみると、ガダマーの理解の理論があるアポリアを抱えており、これまで見られてきた「現前の形而上学」に合致する性格をもっていることが分かる。ガダマーの＜地平＞概念は、一方においては「状況」を意味するものであり、ガダマーはそれによって、われわれが初めから歴史の内に否応なく置かれていることを強調しているが、＜地平＞はもう一方においては、著者と解釈者の言語的意識内容を示す概念としても用いられている。ガダマーは「地平融合」によって著者と解釈者の言語的意識内容が一つの大きな地平へ溶解してゆき、そのことによって理解が達成されると考えている。このような理解の理論においては、一定範囲の広がりを占めるものとして言語的意識内容が対象化されて考えられており、対象的な存在者の結合による連続的な理解が実現可能であると考えられている。だが、このような融合による連続的なものとして理解を捉えようとする見方は、自他が溶解して合一化するというイメージを伴っており、他者の＜他性＞を逸することになってしまう。またガダマーの言う「地平融合」は、現在において生き生きと遂行される直接の対話において、本来的な形で生じると言われている。テクストの読解も、このような生き生きとした対話の場面に連れ戻されねばならないとガダマーは言っている。言語的意識内容を対象化する見方と、現在における直接の対話に依

拠する姿勢とが結合して形成された思考は、明らかに「現前の形而上学」に合致するものである。

実際ガダマーとデリダとの間では論争が行われたことがあり、デリダがガダマーを批判する際の論点は、われわれが指摘したところとかなり重なっている。そして、デリダの批判によってさらに明らかにされたことは、上に見られたガダマーの姿勢が、言語活動において<意志>が存在することを自明のこととして前提する見方を伴っている、ということである。言葉を発する者が理解されようとする意志をもっていることは、ガダマーにとってはまったく自明のこととして考えられている。このことがデリダの批判を通して、本来の争点とは別に思いがけず明らかにされたのである。

だが、言語活動が<意志>を伴っているということは本当に自明のことなのであろうか。この問題は、デリダーサール論争の争点の一つであった「インテンション」の問題と重なっている。先に見られたようにデリダの主張は、発言が、それが発せられる際の発話者のインテンションから切り離されてもなお反復されるべくコード化されていなければ、有意味なものとして機能しえない、ということであった。この「反復可能性」がとりわけよく見て取られるのが、虚構的言説という非現前性のきわだった場面においてである。また「反復可能性」は、話し言葉よりも「書かれた言語(エクリチュール)」においてより純粋に存立している。

サールはこのようなデリダの主張に対して、発言とインテンションとはつねに一体になっており、両者を分離させて考えることはできないこと、発言が構成されるとき同時にインテンションも構成されることを強調した。そして、このことはエクリチュールにおいても例外ではない、とサールは主張している。だがサールの主張は、ある文が例えば単なる例文として挙げられているケースを処理しようとするとき、困難なものになっている。このようなケースにおいては、インテンションが存在するとはやはり言いにくいのである。それゆえ、話がこのことに移るとサールは、「インテンション」に代えて「インテンショナリティ（志向性)」という言葉を多用する。サールの言う「インテンション」はデリダの言うそれとは異なるものである上に、サールの議論には「インテンション」と「インテンショナリティ」との混同が見られる。

この「インテンション」と「インテンショナリティ」との混同ということを考慮に入れることが、言語行為論における「意図（インテンション)」の問題を考えるための大きな鍵になるように思われる。本論文ではこの観点から「インテンション」に依拠する言語行為論者の代表格であるグライスとストローンの理論について検討することにする。

グライスは人為的に伝達される意味を、「斑点がハシカを意味する」場合や「黒雲が雨を意味する」場合の「自然的意味（natural meaning)」から区別して「非自然的（nonnatural）意味」と呼び、それを形成する決定的契機が「意図（インテンション)」であると考えた。発話者がある信念を引き起こそうと意図し、同時に、受け手がこの意図を認知することによってその信念を抱く、というのが、グライスが提示した意味の伝達の図式であった。ストローソンはさらに、意図が多層的に絡み合っているケースを問題にし、グライスが提示した条件にさらに別の条件を補足することを提案した。だが、グライスやストローソンが言う「インテンション」は明らかに発言の背後にあ

る心理的なものであり、それが他者に対して透明になりうるかどうかが、そもそも問題であろう。そしてそれ以前に、「インテンション」によっては処理できないケースがあることを、グライスもストローソンも認めている。それは「赤信号は交通が停止しなければならないことを意味する」というような場合である。この場合には、特定の個人のインテンションはまったく関与していない。この場合にあると言えるのは「インテンション」ではなく「インテンショナリティ」であり、それは公共の規則に帰着されるものである。ここに至ってわれわれは、「反復可能性」に「インテンショナリティ」を加えたものを言語の根本現象と見なす立場をとることができる。

最終章は、これまでわれわれが得た論点を再確認する意味で、とりわけ「エクリチュール」概念のもつ意義をさらによく見極めることを目指したものである。その際、「これ」や「あれ」、「ここ」、「私」のような指示詞について重点的に検討した。このような指示詞においては＜対象への関係＞が純粋に実現しており、反復可能性を免れているように見えるからである。だが、書かれたテクストの中で現れる場合を考えれば分かるように、指示詞が純粋な指示を実現していると単純に言うことはできない。フィクションの中で登場する「これ」という言葉は何かを指示しているのだろうか。リクールの解釈学においては、「テクスト世界」においても指示は成り立つと考えられている。リクールは、「テクスト世界」内の事象を「可能性の現実」と呼び、それに対する指示を「第二度の指示」と名付けて、現実世界において成り立っている直示が類似しているものとして考えている。ここの見られるのは、テクストによって形成される「可能世界」を「現実世界」の単なる変様体と見なす姿勢である。リクールの議論は、エクリチュールの固有の機能に着目していながらも、「パロール／エクリチュール」の常識的区別にとどまっており、この区分秩序そのものを問題化するところまでには至っていない。われわれが目指さなければならないことはむしろ、「エクリチュール」において純粋に存立している「反復可能性」のあり方を具体的に理解することである。「反復可能性」はさまざまな相において指摘されうるものであるが、最も一般的には言語の＜規則＞として実現していると考えられる。一見陳腐にも見えるであろうが、言語が規則によってコード化されているということが、デリダの「エクリチュール」概念に属していることなのである。

＜規則＞によって確立されている全体的な言語体系に依拠する見方はとりたてて新しいものではない。それはたとえば、中期以降のメルロ＝ポンティが「ラングとパロールの弁証法」と呼んだものに似ているし、それゆえまたソシュール的な見方にも重なるものであろう。ただ本論文が主張したかったのは、言語を哲学的に探求することは、自らの立論の根拠をも問題化する姿勢をつねに伴っていなければならない、ということである。そのような姿勢をわれわれは≪自己関係性≫と呼んだのであった。それは、探求が当の探求自身に向かうこと、自らのの探求そのものを自己反省的に考察する態度のことであり、それをわれわれはフッサール－デリダの言語探求において見て取ったのである。

論文審査結果の要旨

本論文は「序」に続く本論全九章および「結語」とからなり、全体としてフッサール現象学による言語哲学の基礎づけをデリダの「脱構築論」の立場から批判的に検討するものとなっている。まず「序　哲学の主題としての言語」においては、20世紀の「言語論的転回」以後の哲学がなぜ言語を主題的に考究してきたかが問題とされ、それが「言語の＜意味＞の存立の可能性への問い」に集約されるものであり、したがって哲学は自明の前提とされてきた「意味」を問題化し、その根拠を根底から問い直す作業でなければならないことが強調される。

「第一章　フッサールの言語論とその問題」では、『論理学研究』を中心として、フッサールがいかにして言語的意味を現象学的方法によって基礎づけたのかが分析される。論者は意味のイデア性と「ノエマ」概念の解釈をめぐるこれまでの研究経過を整理した上で、フッサールにおいては、言語に意味を与えているのはわれわれの意識（意味付与作用）であること、すなわち意味の存立する場所は意識の＜内在的＞領域であることを確認する。しかし他方で、認識の権利源泉を「原的に与える直観」に求める『イデーン』においては、意味を対象的なものとして捉える傾きが強まり、＜対象への関係＞を意味の基本的事態と見なす態度が前面に出てくることが指摘される。現象学における、このような「イデア主義・観念論」的性格と「直観主義・経験論」的性格との両義性を止揚するために、論者はフィンクの示唆に従って「心理学的ノエマ」と「超越論的ノエマ」の区別を導入すべきことを提案する。

「第二章　現象学的還元の構造」においては、現象学の方法的基盤を形作る「還元」の手続きが、フッサールのいう「デカルト的道」と「心理学者の道」との区別に即して検討される。それによれば、還元は実在的対象の排去ではなく、その最終段階で開示される超越論的主観性は、あらゆる超越対象（事物）をその実在において志向的に保持するのである。しかしながら、この操作は＜直接性＞に定位し＜近さ＞に根拠を求めることにおいて、『論理学研究』における意識内在的立場と軌を一にしており、デリダによって「現前の形而上学」として指弾されることになる。

以上の第一、二章における考察は、論者の現象学に対する深い造詣を窺わせるものであり、現象学的言語の問題点を的確に浮き彫りにする論述となっている。また、関連文献にも遺漏なく目が通されており、論証の筋道も十分に読者を納得させるものである。

「第三章　デリダの言語論とフッサール現象学」では、デリダの「エクリチュール」概念がフッサールの『幾何学の起源』の緻密な読解を通じて形成されたことが跡づけられる。同時にデリダのオースティン批判を契機にして展開されたサールとの論争を詳細に吟味することによって、言語一般の可能性の条件として「反復可能性」の概念が取り出される。論者によれば、デリダの言語論はフッサールの探求を徹底させることによって乗り越えようとしたところに成立したものであり、必ずしもフッサールの立場を否定するものではない。

「第四章　現象学的心理学と超越論的現象学」は、デリダの批判を踏まえた上でフッサールの

「現象学的還元」概念の考察に当てられている。自然的態度から超越論的態度への移行、すなわち還元の遂行には、当初から自己前提的・循環的なアポリアが付きまとっていた。それを解決するために、フッサールは「現象学の現象学」という<自己関係的>な反復的考察に突き進んだ。論者によれば、その結果フッサールが至り着いたのは、彼が明証性の最終的基盤とした「知覚」が実は純粋な知覚ではなく、現前的知覚に全面的には回収されえない非現前性からの働きかけを伴ってはじめて成立しうる、という逆説的事態であった。

続く「第五章　脱構築と自己関係性」では前章の帰結が敷衍され、フッサールが見いだした地平的潜在性が果たす機能はデリダの「差延」概念が果たす機能と全く同じものであることが指摘される。さらに、デリダーサール論争の再検討を通じて、デリダの「脱構築」的思惟が、フッサールの「自己関係性」をめぐる考察、すなわち自分自身の探求を自己反省的に考究する態度と並行的であることが明らかにされる。

以上の第三章から第五章まで、フッサール現象学とデリダの言語論とを対比し、両者の共通性と差異論性を論じた諸章は、本論文の中心をなす部分である。デリダによるフッサールの批判的超克という通説に異を立て、前者の脱構築論と後者の「自己関係的」探求との間に内的関連性を指摘する主張は、論者の独創に属するものである。ただし、問題提起の重要性に比して、論証すべき点が単なる比較に終わっている印象を否めない。この点は今後の課題とすべき事柄であろう。

「第六章　還元の徹底化と<現在>」においては、後期フッサールの遡源的考察が、その最終的帰着点を一切の非現前性を含まない純粋なヒュレーとの出会いの中に求めていたことが原典に即して緻密に辿られ、それが超越論的還元の徹底化による「生き生きした現在」への還帰にほかならないことが明らかにされる。しかし、論者によれば、この「現在」への遡行もまた現前性に寄与している無限の非現前性の関連に取り巻かれているのであり、フッサールの考察は無前提性を追求する彼の当初の意図に反して、われわれが常にすでに歴史性を刻印された「解釈学的状況」のただ中にいることを示唆しているのである。

「第七章　解釈学と脱構築」は前章の帰結を受け、フッサール現象学の哲学的解釈学による乗り越えが可能か否かが、ガダマーーデリダ論争に即して検討される。論者によれば、ガダマーの解釈学は言語的意識内容を対象化する見方と現在における直接的対話に依拠する姿勢との結合に基礎を置いており、明らかに「現前の形而上学」の系譜に属する点で、これまでの批判が妥当する。それゆえ、言語理解の条件は解釈学が主張する「地平融合」における連続の中にではなく、むしろ断絶を前提とする「反復可能性」の中に見いだされるべきなのである。

「第八章　言語におけるインテンション」は今一度デリダーサール論争に戻って、言語行為論における「インテンション」の問題が取り上げられ、デリダの「反復可能性」概念が「インテンション（意図）」からは独立であるが、「インテンショナリティ（志向性）」とは不可分であることが明らかにされる。この「インテンション」と「インテンショナリティ」との区別は、論者がサールによる混同を批判して導入した概念であり、錯綜した言語行為論の議論に新たな補助線を引いたもの

として高く評価されてよい。

最後の「第九章　エクリチュールをめぐって」および「結語」においては、これまでの考察がまとめられるとともに、言葉が音声や文字によって何事かを意味しうるのはその「反復可能性」に根拠を持つものであり、具体的にはそれが言語の様々なレベルでの「規則」として実現されているという結論を導き出す。さらに論者は、言語規則の反復が純粋な繰り返しではなく、あくまでも「差異を含んだ反復」であることに注意を促して論を閉じる。

以上のように、本論文はフッサールの現象学的言語論の形成の跡を辿りつつその問題点を剔抉し、それがデリダのエクリチュール論によって内在的に克服されていった過程を説得的に叙述して通説に見直しを迫るとともに、それを踏まえて言語的意味の成立機序について独自の見解を披瀝して現象学研究に新たな地平を開いている。敢えて望蜀の言を述べれば、各章の間の有機的関連にいま少し注意が払われるべきであり、また繰り返しを避けて論証の筋道を明確化する点でいまだ努力の余地が残っている。加えて、結論を導出する過程がデリダの所説に依拠しすぎているように見えること、また「反復可能性」と「規則」との関係についてはウィシゲンシュタインの規則論などを参照して考察が深められるべきことなど、今後の研鑽に期待すべき点も少なくない。

しかしながら、これらの論点は論文全体の水準と達成度という観点からは無視しうる瑕瑾というべきであり、いずれも論述内容の評価に関わるほどのものではない。総じて本論文は、フッサール研究、とりわけ現象学的言語論の分野に新たな知見を加え、当該領域におけるる今後の研究の発展に貢献したことは疑いを容れないところである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものであると認められる。